

風景をわたしのものにする
—手の先のエノコログサから夕焼け空まで—

22118037 武田 恵実
指導教員 宮 晶子 教授

帰り道	時間的連続性	私的風景化
記憶と経験	近視点的接触	親密化

1. 研究の目的と背景 —エノコログサの帰り道—

小学校の帰り道、道の両端に生えたエノコログサを手で触りながら歩いた。その先には田んぼと夕焼けが広がっており、その風景の中に自分の姿がある。手の先のエノコログサから遠くに広がる夕焼けまで、それらが全て自分のもので、自分の世界が永遠に続いているような感覚を抱き、風景を私的なものにしていった。



図1 小学校の頃の帰り道

2. 「帰り道」における体験の可能性

子供の頃の帰り道や駅、バス停で私は過去を想起し、未来を想像していた。そこは過去—今—未来を繋ぎ、記憶と経験が更新され、蓄積していた場所であった。季節や時間の流れを感じ自分と向き合い浸れるような、通常とは異なる特別な時間軸が流れる場所であり、自分の痕跡を辿り自らが時間の連続性の中にあることを立ち止まって確認することができる、数少ない場面の一つだといえるだろう。

3. 問題意識 —現在の帰り道—

このように子供の頃の帰り道は、日常の中で普遍的な場所でありながら個人にとっては特別な私的世界となる、という特性を持つ。しかし、大人になると交通網を經由して都市と行き来することで、私的世界と向き合う時間と機会は少なくなり、日常生活は一人一人のしぐさや出来事の次元からかけ離れた大きな変化と隣合わせだ。自分の経験や意図によって生まれる小さな変化や偶然、そ

して自然や季節の時間の流れを自分の中に取り込み、感じる瞬間が必要である。帰ってくる場所で私的体験を起こしやすくすることで、毎日をただの繰り返しと捉えずに今その一瞬を大切に思うことができる空間を作るべきだと考える。

4. 人間の記憶と経験

ある出来事が起こった時に、その出来事と一緒に自分自身の存在を合わせて覚えているということは、人間が持つ記憶特有である。

自分の行為や出来事（＝経験）は場所に結びつけられ、時間と共に更新されていく。そして自分自身を時間的連続性を持つ存在として認識することで、「私は今ここにある」という自己の実存に確証を持つことができる。

5. オイケイオーシス —親密化の過程—

自己の周辺環境を自分のものだと感じることに関連して、古代ストア派のオイケイオーシス (oikeiōsis) という概念がある。日本語に訳すとすれば「親密化」であるそれによると、人は胎児の頃からまず自分の意識と身体に働きかけそれらを所有し、だんだんと内から外に向かって周囲の環境や他者を所有していき、同時に自身はその環境に同化していくのだという。

風景を見る主体とそれを取り巻く場所がお互いに干渉し合い、相互作用を引き起こすことによって、場所自体は時間の流れの中で小さな変化を起こし続けながら主体はその場所に馴染んでいく。そして、物理的な「モノ」に加え街の営みや他者の振る舞いまでもを含んだ全体が、自分にとって親しみのある私的風景になっていく。

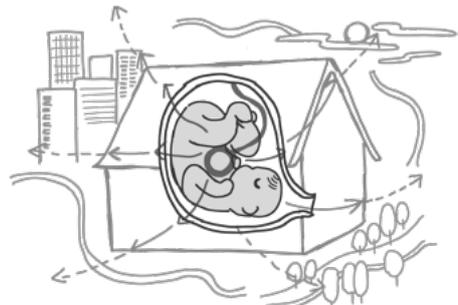


図2 オイケイオーシスのイメージ

6. 私的風景化のための見方

6-1. 俯瞰的想像

場所に経験が結びつくことで風景は私的になり、その時空間に「私はそこに在った」と認識するからこそ、自分自身を絵の中に含める。自分自身を絵画の中に描くように、まるで体の中を抜け出て自分を外から俯瞰的に眺める客観的な視点で見ることで、その場所の中心が自分であることを体感し、ゆったりとした時間の流れを知覚することができる。

6-2. 近視点的接触

「手の先のエノコログサ」と表現した近視点的接触である。私たちは手や足先など自分の身体に近い、親密な距離にあるものの細部に注目し「もの」として見て愛おしく主観的視点を持っている。道に生える草花や路地等のものの溢れ出しは、みんなの目に触れるものであり、視覚的な共有物であるといえる。これらを通してそこに生活する人の営みや痕跡を見ることで、風景を自分自身の延長に感じやすい。

このように手元に広がる小さな世界を見る視点と大きな存在の中にある自らを俯瞰する視点を行き来することで、風景は記憶や経験と結びつき私的風景化が更新されていく。

7. 設計提案 —駅前広場—

敷地は茨城県龍ヶ崎市にある関東鉄道竜ヶ崎線竜ヶ崎駅前である。竜ヶ崎駅は市内三駅を往復するワンマンカーであり、利用者は決して多くはないが都市部と結ぶ敷地周辺の唯一の最寄駅であることもあり、通勤通学利用の人が毎日行き来する。



図3 竜ヶ崎駅前の敷地位置

ここにバスロータリーを跨ぐ駅前広場の設計を提案する。私的風景に浸るため、屋内外や屋根下空間が入り混じる中間領域を多く設けた余白部分を作りながら、その中に人々が居場所を見つけ、勉強や飲食などができる機能的空間を点在させる。曲線の構造が誘われ、全体に広がる自由な余白部分へと意識を移しながら、ただ景色や時間に体を預けたり、他者の痕跡や振る舞いに意識を向

けたりする。余白部分は不定期で開催される商店街のブースが設置され、人々の活動により流動的で毎日変化し続ける空間となる。

8. 設計手法

俯瞰的想像と近視点的接触を同時に起こす構造体として、高い直立壁とアール状の壁を全体に配置する。高さが変化するアール状の壁を辿って歩きながら風景は空から手元・足先へと移り変わってゆく。その先の背の高い直立壁を思わず見上げた先から自分を俯瞰するとともに足元を眺める。これらの2種類の壁を頼りに部分的・仮設的に屋根や床をかけていく。身体がウチとソトに絡まり連続する空間が、断片的で偶然的な発見を起こしている。



図4 アールの壁と直立壁

これらの構造は風景との出会いの手掛かりになると同時に、人間の小さな営みの支えにもなる。空間を意味・しぐさ・出来事の次元に吸収するため、複数のマテリアルを採用し、小さい机や棚、低い屋根、暖簾や踏石などを介入させることで、構造を小さいスケールが横断する。構造を補強する柱や斜めの梁材が視線を外側へ拡大させ、壁に沿って配置する床は多様な高さや領域を作り出す。



図5 段状の床と小さな梁・柱

このような建築で「風景を私的なものにする」経験をするので、日々の生活をただの繰り返しと捉えるのではなく、何気ない一瞬をかけがえのないものだと捉えることができることを強く期待する。

主参考文献

- ・多木浩二『生きられた家』青土社 1976年
- ・エマヌエーレ・コッチャ『家の哲学』勁草書房 2024年
- ・A・A・ロング『ヘレニズム哲学』京都大学学術出版会 2003年
- ・エヴァ・ホフマン『時間』みすず書房 2020年